

目的 S家は慶長年間の創業で約400年にわたり吳服衣物業を営み、当主は代々襲名している。同地区は陽明学の思想的背景をもち、S家においても、知行合一を親典とする藤樹学の実践を多角経営に取り入れ、時代に敏感に積極的商法に当る。本研究は前報に引き続きS家当主婚姻に関する諸帳筈を資料として、S家の婚姻に対する姿勢を考察すると共に、当時の当該地域の結婚の実態を捉えようと試みた。

方法 S家口定祝儀受納帳、婚礼結納披露客附帳、婚姻祝儀受納帳その他関係諸帳筈の分析及び当主よりの聞き取りを参考に考察した。

結果 当主は明治38年生れ、昭和4年東京商科大学卒である。夫人(花嫁)は明治43年会津高田に生れ、生家は酒造業で、昭和8年口定め(婚約)の披露の後、東京女子家政学院を卒業している。当主の昭和5年2月から11月までの兵役の解除を待つて、同年12月婚姻披露、その間同年9月に結納が取りかわされている。兩人共当時の一地方で極めて高等の教育をうけていることが注目される。また両家及びその親族はいずれも同地方の名門財閥で当時の結婚が一定のレベルの範ちゆうで行われていたことが伺える。婚姻の前年S家は二間半の床の間付き約20坪の座敷を増築しているが、その用材の調達は当主誕生よりすめられ相続者への配慮は深遠である。諸帳筈の分析によれば、婚姻の企画は詳細綿密、分家親族も含めS家一代事業として取り組まれたことがわかる。また、披露宴は5日間にわたり、約200名が招待されている。それらの客附け、祝儀品、祝膳献立、諸経費などより当時の名門家系の婚姻に関する実態及び地域の結婚の風習を伺うことができた。